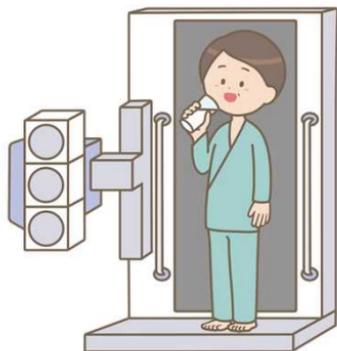
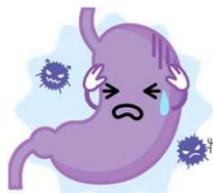


胃部X線撮影



胃部X線検査は、胃を膨らませる発泡剤とバリウム溶液を飲み、食道から胃や十二指腸の内面を被っている粘膜面を浮かび上がらせて、異常の有無を調べる検査です。この検査で浴びるX線の量は、3.7～4.9mSvと報告されています。この線量を胃がんの発見の利益が上回ります（日本消化器がん検診学会）。

胃部X線検査は、胃がんの早期発見が最大の目的ですが、潰瘍（粘膜の掘れ込み）やポリープ（粘膜の盛り上がり）、まれには食道がんがわかります。また、胃や十二指腸のほかに、X線に写る胆石がわかることもあります



胃がんは他の多くのがんと同様、早期の間は自覚症状がほとんどありません。厚生労働省の指針では40歳以上の方（特に50歳以上の方）を胃がん検診の対象としています。

男性ではおよそ9人にひとり、女性ではおよそ18人にひとりが一生のうちに「胃がん」になるといわれています。胃がんはかつて日本人の

がんによる死亡数の第1位でしたが、最近は診断方法と治療方法が向上し、男性では第3位、女性は第5位となっています*。

胃がんの死亡率は、最近、横ばいの傾向にあります。その理由は、治療法の進歩に加え、さらに検診によって早期がんが発見される機会が増えたことだといわれています。

がんは胃壁の内側、粘膜上皮から発生します。胃壁は内側から外側にかけて粘膜上皮から漿膜までの数層が重なってできています。がんが粘膜上皮から粘膜下層までにとどまっていれば「早期胃がん」の状態、この時期に手術でがんを取り除くと、ほぼ（95%以上）治るといわれています。しかし、がんが筋層から外側に拡がると、「進行胃がん」の状態となり、治癒率は65%以下に下がります。

*出典：厚生労働省「令和4年人口動態統計」